

文化芸術施設 3331 Arts Chiyoda における 地域連携型展示の課題と展望

滝口正哉

はじめに

平成29年（2017年）4月16日、大津市内のホテルで開かれた滋賀県主催の地方創生セミナーで、山本幸三地方創生相が講演後、長浜市の藤井勇治市長の「インバウンド観光振興について助言を」というコメントに対して、文化財観光の振興をめぐり見学者への案内方法やイベント活用が十分でないことを指摘し、「一番がんなのは学芸員。普通の観光マインドが全くない。この連中を一掃しないと」と発言し、物議をかもしたことは記憶に新しい。東京オリンピックを控えたなかで、地域の活性化や経済効果、また、インバウンドを含めた観光に期待する志向性は、近年、博物館系施設にも押し寄せ、それが展示のあり方を左右することにもなりかねない状況を招来させている。

一方、現代アートが地域活性化に寄与しようとの見解が今世紀に入って注目されるようになってきた。すなわち、金沢21世紀美術館に代表されるような、創造都市のまちづくりを目指す金沢市や、文化芸術創造都市構想を立ち上げた横浜市、さらには株式会社ベネッセコーポレーションがスポンサーとなってアートプロジェクトを行っている瀬戸内海の直島など、自治体と地域の企業やNPOが協働し、伝統的産業や建造物などの地域資源を外部の人材の発想を取り入れながら進めている事例が一定の評価を得るに至っているのである。

従来、文化財をはじめとする地域の資源を公開するには、保存とのバランスをとることが不可欠で、地域博物館の展示ではその点に一定の制約を受けるため、内容や企画が硬直化しかねないという課題があった¹。また、現代アートの客層と地域博物館の客層とは一定の相違がみられるのも事実であろう²。

そこで本稿では、現代アートの拠点として発足した3331 Arts Chiyoda（アーツ千代田 3331）における祭礼展示を通して地域連携を目指している実践事例を取り上げ、東京中心部における現代アート施設が地域に果たす役割や可能性について考察していきたい。

1 3331 Arts Chiyoda の取り組み

3331 Arts Chiyoda は平成22年（2010年）6月にオープンした施設で、平成17年（2005年）3月に閉校となった練成中学校の校舎・敷地を再活用したものである。練成中学校は昭和23年（1948年）2月に開校した千代田区立の中学校で、かつては越境通学者の多い進学校だったようだが、少子化の影響を考慮した千代田区の方針により、平成17年3月に今川中学校とともに閉校となって、一橋中学校に吸収合併されるかたちとなった（このとき神田一橋中学校に校名を変更し

ている)。

折しも千代田区では、文化芸術の振興を通じて区民の豊かな生活を実現し、優しさのあふれる美しいまちを創ることを目的として「千代田区文化芸術プラン」を策定したばかりであり、これに沿って練成中学校跡地をアート活動の拠点として再活用する計画が進められていった。運営は公募により民間の団体が行うこととし、30 社ほどが参加するコンペを経て、合同会社コマンド A (以下コマンド A 社) が区と 5 年間の契約を結んだ (その後契約を更新して現在に至る)。

ここに文化芸術活動を行っている人たちを集積させるという区側の条件を引き受けたコマンド A 社は、地域再生型のアートプロジェクトに取り組んできた東京藝術大学准教授 (現在は同校教授) 中村政人氏を中心となり、同氏が 1998 年から続けているアーティスト組織コマンド N を母体に設立されたもので、以後はコマンド A 社が 3331 Arts Chiyoda のマネジメントを行うこととなった³。

地域に開かれた新しい文化芸術活動の発信拠点を目指して開設された 3331 Arts Chiyoda は、地上 3 階・地下 1 階からなり、各階の構成は表 1 のようになっている。多くは貸しスペースであり、ここから収益を得る仕組みになっている。貸しスペースはクリエイターや NPO 法人・企業などさまざまなが、ギャラリーとして使用される場合も多い。そして元来コマンド N が現代アートを中心とするアーティスト集団であるため、各テナントの活動もその方向性が顕著である。また、コマンド A 社が中心となって行う 1 階のメインギャラリーと 3331 ギャラリーも、現代アートの展示会を中心に行われている。

表 1 3331 Arts Chiyoda の施設概要

階	主 な 施 設	概 要
屋上	屋上菜園	32 区画のレンタル菜園があり、1 区画あたり約 1 坪で 1 年ごとのレンタル方式をとっている。
3 階	入居団体スペース	文化芸術活動に携わるクリエイターや NPO 法人など、さまざまな団体が入居している。団体が設置しているギャラリーなどは見学可能。
	シェアオフィス	複数の入居者が同居するスペース。
2 階	入居団体スペース	国立大学法人京都工芸繊維大学が運営する KYOTO Design Lab 東京ギャラリー他 8 団体が入居。
	貸会議室	10 人までの小規模な打ち合せや発表会での利用に最適なレンタルミーティングスペース。
	体育館 (多目的スペース)	レンタルスペースとしてもご利用でき、イベント等が開催されることもある。
	ウッドデッキ	練成公園と施設をつなげるフリースペース。夏には、3331 がコミッションワークとして、日比野克彦氏と取り組む「明後日朝顔プロジェクト」の朝顔を育成。
	コミュニティースペース	全面ガラスばりで日当たりが良く、施設を訪れる人が利用できる憩いの場。有料イベントが開催されることもある。
	コミュニティカフェ	カフェやレストランが入居。
	ラウンジ	日本各地や東アジアのアート情報などの資料が閲覧できるスペース。
		子どもたちがいらなくなったおもちゃを持ち寄り、「かえっ

1 階	かえるステーション	こ」できるスペース。「かえっこ」は昼から夕方まで無料で利用でき、大人でも参加可能。
	3331 × コドモノタタミ おやこ休憩室	現代のキッズスペースに似合うデザインと純国産にこだわった新スタイルの畳「コドモノタタミ」を全面に用い、おもちゃで遊んだり、絵本を読んだり、お出掛けの合間に休憩したり、親子でゆっくり過ごせる無料の休憩スペース。
	メインギャラリー	期間ごとに展覧会を行う 3331 のメインギャラリー。
	3331 ギャラリー	新進気鋭アーティストによる現代アート作品をはじめ、さまざまな表現を紹介する 3331 主催のギャラリースペース。
	3331 COMMUNITY BOOKS	まちの人たちや 3331 館内のギャラリー、アーティストやクリエイター、利用者などから寄贈された本や資料を陳列。
	3331 CUBE shop&gallery	クリエイターや企業のさまざまな表現を集めた、3331 Arts Chiyoda が展開するショップ&ギャラリー。
地下 1 階	アーティストスタジオ	レンタルスペースで、グループ展や個展に適した壁面の多い空間。
	ワークショップルーム	3331 のスクールプログラム「ARTS FIELD TOKYO」の講義が行なわれるスペース。レクチャーや小規模な上映会、ワークショップなどにご利用可能。
	Bambinart Gallery	企画専門の現代美術ギャラリーで、展覧会の開催を中心に、若いアーティストから国内外で活躍中のアーティストまで、幅広く紹介。

従来、文化芸術活動と利益を生み出す事業は対立軸で捉えられることが多いが、コマンドA社は当初より経営とアート活動を両立し、地域にも開かれた体制を目指していた点に注目する必要がある。すでに吉澤弥生氏が民間の組織・団体が行政と連携する場面において、「自分たちがやりたい活動は予算外で」というジレンマに陥らない戦略として NPO 以外の組織で運営する事例の分析を行い、そのなかで 3331 Arts Chiyoda を取り上げており⁴、自由なアート活動を支えるための徹底した経営は、同社が契約の更新を果たして現在 2 期目にあることから、一定度の成功を収めているといえよう。

では、「地域に開かれた活動」という点ではどうなのか。たしかに 1 階のウッドデッキ・コミュニティスペース・ラウンジ、2 階の貸会議室や体育館、屋上の屋上菜園などは地元の人々が利用する場面も想定でき、地元の子どもたちも使えるような配慮がなされている。しかし、3331 Arts Chiyoda は千代田区外神田 6 丁目に位置しており、神田という地域の一角にある。一番の最寄駅は銀座線末広町駅だが、秋葉原も近く、さらに台東区の御徒町・上野や、文京区の湯島にもほど近い。千代田区の施設でありながら、区内最北の地域に位置している点と、江戸時代以来の商業地域神田とどう向き合っていくのかという大きな課題を抱えているのである。

その点でいえば、平成 31 年 (2019 年) 4 月 27 日から 5 月 19 日までの予定で開催した「シド・ミード展 PROGRESSIONS TYO 2019」は、YAMATO2520 やヱガンダムなどで知られるアメリカの工業デザイナー、シド・ミードの活動歴のなかから 150 点を展示する原画展で、日本での個展は 34 年ぶり 3 回目、今世紀では初の開催となることもあって、アニメファンを中心に多くの来場者があり、急遽 6 月 2 日まで会期を延長し、来場者数は最終的に 32,000 人余に達したことは大きな成果といえよう。隣接する秋葉原の地は現在、「アニメ・オタク文化の聖地」として東京屈指

の観光地にもなっていることから、観光への接近という点では欠かせない要素だろう。しかし、神田という地域的特性や、地元住民へのアプローチという点では、1 階カフェ COPAINS de 3331 において、神田錦町にある GLITCH COFFEE&ROASTERS のオーナーバリスタ鈴木清和氏がコーヒーの監修を行うなど、地域との連携が窺える要素も増えつつはあるが、他にも活動の余地が残されている部分といえよう。

すなわち、神田地域は神田川を挟んで北側の外神田と、南側の内神田とに分かれ、ともに江戸時代初期から 400 年余にわたる商工業の町として栄えた歴史的な経緯があり、古くからの住民も存在する。また、千代田区という観点からいえば、麹町や番町も歴史的蓄積の豊富な地域である。3331 Arts Chiyoda としては、まず地元の外神田地域から地元の住民や商店・企業との連携を図り、地元へ愛される施設、地元民が気軽に利用できる施設を模索するのが急務であった。

そもそも施設名称の一部に用いられている「3331」とは、神田・日本橋地域を中心に受け継がれてきた「江戸一本締め」における手拍子の音を表している。これには 3 回の手拍子を 3 回繰り返すことで「九」＝「苦」となるが、最後の 1 回で「九」の字に一画を足して「苦」を払い、「丸」になるという意が込められている。「3・3・3・1」と手拍子をすることで地域の人々が「丸」く笑顔でつながるという精神を表し、3331 Arts Chiyoda が江戸期から受け継がれてきているこの手拍子の仕組みのように、伝統文化と現代芸術文化の出会う場所となり、区民と街が共に育つためのアートセンターを目指すのだというコンセプトを反映したものなのである。このように考えると、3331 Arts Chiyoda はその施設名に地域とともに歩む姿勢が明確に表されており、上記の課題を果たすことは、当初からの使命であると解釈できよう。

筆者は千代田区教育委員会に平成 28 年（2016 年）まで所属し千代田区域の文化財の調査や、資料の収集や展示活動を行うなかで、地域の方々とも多くの関わりをもってきた。その点でいえば、地域の人々のなかには、神田や麹町・番町などが江戸時代から江戸の中心域にあって、現在でも江戸の文化を継承しているのだという自覚をもつ方も少なくないことは経験上明らかだった。そしてその自覚が最大限に発揮される場面が、神田祭・山王祭であり、町内会ごとに揃いの半纏を着て町神輿の渡御や神幸祭の巡行に参加したり、神酒所を建てさまざまな装飾を施す一連の行為のなかに地元を強く自覚する要素が見出せるのである。

そこで 3331 Arts Chiyoda が乗り出したのが、神田祭・山王祭を取り上げた展示を通じた地域へのアプローチであった。

2 神田祭・山王祭の現状

神田祭は神田明神（神田神社）の祭礼で、山王祭は日枝神社（山王権現）の祭礼である。千代田区内にある両神社の祭礼は江戸時代、天下人たる将軍の上覧を受ける別格の祭礼であったことから、「天下祭」と俗称されているように、現在でも東京において代表的な祭礼となっている⁵。

将軍上覧の嚆矢は山王祭が 3 代将軍家光の寛永 12 年（1635 年）、神田祭は 5 代将軍綱吉の元禄元年（1688 年）で、延宝 9 年（1681 年）に両祭礼は隔年交代で行うものと定められ、以後山王祭

は子・寅・辰・午・申・戌年の6月15日、神田祭は丑・卯・巳・未・酉・亥の9月15日に行われてきた。明治維新後は上覧がなくなり、氏子町域や巡行路の変更がたびたびあったが、戦後は神田祭が5月中旬に、山王祭は6月中旬に行われ、現在でも行列の巡行は隔年交代となっている。

両祭礼は江戸時代、神社の出す神輿の他に、氏子町から出される山車と附祭があつて、神田祭は1～36番に、山王祭は1～45番に氏子町を編成して、それぞれ山車が氏子町の負担として出されていた。また、附祭とは当番となる氏子町が臨時で仕立てた余興の出し物をいう。踊り屋台・地走り踊・練り物の3種からなるといわれ、踊り・長唄・三味線・太鼓・小鼓・笛などの芸能が取り入れられ、江戸の人々になじみ深い古典を題材としたり、歌舞伎などの流行物を取り入れ、さまざまな仮装や滑稽な仕草などをして練り歩くのを大きな特徴としている。

ところが両祭礼では、明治維新後の政情の変化や、市街の整備によって氏子町や住民が変化したことにより、山車を保持する各氏子町の経済的な負担が深刻化し、修復や新調が容易ではなくなっていた。また、明治20年(1887年)前後には市中に高さ9メートルの電柱から地上4メートルの横断線が張りめぐらされていき、行列の進路を阻んだ。幕末の山車は上下昇降式の構造をもち、高さを調節する機能を有していて、これを「江戸型山車」と呼んでいる。かつて両祭礼の山車が4.5mほどの高さがあった田安門・半蔵門などをくぐって江戸城内に入っていたことを考えれば、この電線の高さは直接的な障害にはならなかったようにも思えるが、わざわざ高さを伸縮させて通行することの意義は、幕府が消滅し、将軍の上覧を受けることのなくなった時点で失われていたといえる。

こうして東京の街に居場所を失った山車は、あるものは関東周辺の小都市に売却され、またあるものは町内の倉庫に永く眠る道をたどっていった。このうち前者については、山王祭9番瀬戸物町・小田原町一・二丁目・伊勢町の「静御前」の山車人形が栃木市に、21番田所町・通油町・新大坂町の「蘭陵王」の山車人形などが加須市に現存し、地域の祭礼に活かされている。そして、この栃木や加須以外でも川越・佐原・八王子など関東各地で幕末の江戸型山車の意匠や構造を模倣した山車が明治期に制作され、現在も祭礼で重要な役割をはたしている。その一方で、両祭礼では大正期から戦前にかけて、氏子町の山車に代わるものとして町神輿を登場させ、神社の鳳輦とこの町神輿が主流となっていた⁶。

また、後者の地元に残された事例については、神田祭では3番旅籠町一丁目の翁人形の面が神田神社に、21番堅大工町の棟上人形が「飛騨匠」の名称で千代田区教育委員会に所蔵されている。そして山王祭では3番のうち麹町四～六丁目の唐子太鼓打人形と馬乗人形が現存し、どちらも麹町三丁目町会を経て唐子太鼓打人形が「てけてん小僧」の名称で千代田区教育委員会に、馬乗人形が「土佐坊」の名称で日枝神社に所蔵されている⁷。ちなみに、これらについては、筆者が千代田区に所属していた際に担当した展示において、巡行行列の詳細を示す資料として、祭礼絵巻・祭礼番附や文献資料とともに紹介してきている。また、平成15年(2003年)に江戸開府400年を記念して、丸ビルを会場として各地に現存する江戸型山車を一同に展示して以降、山車に関する関心が高まり、以後の祭礼において一部の山車の“里帰り”を実現させている。

一方、附祭については、両祭礼ともに明治維新以降行われなくなったが、近年木下直之氏を中心に、文化資源学会が神田祭附祭復元プロジェクトを立ち上げ、平成 19 年（2007 年）に「大江山凱陣」の練り物、同 21 年に唐子や仮装人物、烏天狗と白象の造り物を出している⁸。その後も同 25 年に神田神社によって新たに製作された「花咲爺さん」をテーマにした山車を守り立てる行列を組み（平成 23 年は東日本大震災のため神田祭は中止）、同 27 年には「神田明神御祭礼御用御雇祭絵巻」（国立国会図書館蔵）に描かれた山車を現代風にアレンジしたものとして「花咲爺さん」と「浦島太郎と竜宮城」を出し、同 29 年には花咲爺さん、犬、大名を乗せた山車（曳き物）を中心に、その前後に里の動物、江戸の物売り、花笠を被った町人などを配するとともに、鳴り物を加えた仮装行列を組んでいる。これらの活動の意図は、祭礼に参加し附祭を自ら経験することで、近代化によって変貌する前の文化を振り返るとともに、現代社会、とりわけ現代都市における祭礼の意義と役割を知る機会とする点にあった。

このように、現在の神田祭・山王祭は、江戸時代の復元を試みる要素を含みながら、新たな創作に挑戦するという新しい方向性を打ち出しており、これらを捉え直す場面として、展示において両祭礼を表現することの意義が高まりつつあるのが現状であろう。

3 地域を結びつける祭礼展示

3331 Arts Chiyoda の祭礼展示は、当初木下直之氏の神田祭附祭復元プロジェクトと連携するかたちで始動した。平成 25 年（2013 年）に実施された「祭礼図巻にみる江戸の粋」展（表 2 における展示会 1、以下展示会は同表の番号のみを表記する）は同年が神田祭の年であることから、神田神社所蔵の千代田区指定有形文化財（絵画）「神田明神祭礼図巻」の 3 巻全長 49.8m を複製実寸で全て展示するのを目玉とした。千代田区指定有形民俗文化財の山車人形「熊坂」、昭和 27 年・33 年（1952 年・1958 年）の神田祭の映像や、外神田連合各町半纏、そして東日本大震災の影響で中止となった 2 年前の神田祭で披露されるはずだった五軒町町会が新調した子ども神輿のほか、子ども山車、五軒町町会の神輿を展示するといった内容だった。この展示によって区内の文化財の紹介がなされるとともに、3331 Arts Chiyoda の所在地の町会である五軒町町会を中心に外神田の各町会の協力を得ることができたのが何よりの収穫だったといえる。

こうなると、翌年の山王祭の時期にもこれに合わせた展示をとということになり、展示会 2 では千代田区の展示や文化財指定に関わってきた筆者が監修を担当することとなった。このときは文政 7 年（1824 年）に制作されたといわれる山王祭の様子を描いた横幅約 2m、高さ約 1.6m の「江戸天下祭図屏風」（神田神社所蔵）や、麴町三丁目の神酒所に現役で飾られていた狩野派絵師自身の河鍋曉斎が描いた「御酒所幕」を高性能スキャンによりデータ化し、実物に近い状態で展示したほか、山王祭の山車や附祭をモチーフにした千社札や、江戸町火消錦絵師として活動する岡田親氏が、祭礼を裏方で支える鳶頭のさまざまな姿を描いた肉筆画などを展示した。

神田祭の氏子町は現在、千代田区の外神田・内神田地域と、日本橋北部地域に広がっている。3331 Arts Chiyoda が外神田に位置していることを考えれば、中央区の日本橋地域へのアプロー

表2 3331 Arts Chiyoda における祭礼展示

番号	開催年度	開催期間	展示タイトル	監修者
1	平成25(2103)年度	4月27日(土)～ 5月19日(日)	祭礼図巻にみる江戸の粋	木下直之(東京大学教授)
2	平成26(2104)年度	5月25日(日)～ 6月22日(日)	天下祭と山王さん～江戸っ子は、山車に絵巻に、木遣り唄～	滝口正哉
3	平成27(2105)年度	4月27日(土)～ 5月19日(日)	神田祭—江戸・東京のひとつとまち	木下直之(東京大学教授)
4	平成28(2106)年度	5月26日(木)～ 6月12日(日)	山王祭のいま・みらい～まちが支える江戸の粋～	滝口正哉
5	平成29(2107)年度	4月30日(日)～ 5月14日(日)	橋を渡る～東京から江戸へ～	木下直之(東京大学教授)・滝口正哉
6	平成30(2108)年度	5月19日(土)～ 6月10日(日)	ときを渡る～“山王さん”を支えた町の150年～	加藤紫識(和洋女子大学特任教授)・滝口正哉
7	令和元(2109)年度	4月27日(土)～ 5月12日(日)	神田祭の元年～変幻自在の江戸の華～	滝口正哉

チがカギとなる。一方、山王祭の氏子町は千代田区の番町・麴町・大手町・丸の内・有楽町地域を「上町」、中央区の日本橋南部地域および京橋・銀座・八丁堀地域を中心とした「下町」に分かれる。これに港区新橋一丁目の一部や、新宿区四谷一丁目の一部も加わる広大な範囲となり、地域的バランスをとるのが非常に難しいことと、何よりも 3331 Arts Chiyoda が氏子町とかなり離れていることが大きな障壁となっていた。

そこで筆者が監修したこの展示会では、地元神田地域の協力を得ながら、「上町」と「下町」のバランスをとるという難題克服を目指した。まず、神田に事業所をもつ創業100年の老舗印刷会社精興社に麴町三丁目の「御酒所幕」の高性能スキャンによる複製を依頼し、これを展示することとした。また、神田神社は山王祭に関連する資料も多く所蔵しており、神社の性格からこれらの登場の機会が少ない点に着目し、山王祭の様子を伝える「江戸天下祭図屏風」や、祭礼のプログラムである祭礼番附を借用することで、地元の協力を得やすい条件を揃えていったのである。

そして、「上町」からは、山王祭において御防講副講元を務める番町地域在住の方から山王祭の山車・附祭を描いた千社札（納札）を借用し、展示した。これは江戸時代中期に神社仏閣の参拝から誕生した千社札が麴町の「麴五吉」という人物が始めたといわれていることに因んだものである。また、「下町」からは岡田親氏の肉筆画を展示したが、小道具や手ぬぐいの持ち方など細部にこだわって描写する岡田氏は、鳶に対する格別の思い入れがあることで知られていた。すなわち、岡田氏は明治時代初期から続く京橋の寿司屋「京すし」の4代目主人でもあり、叔父の鳶頭の影響で町火消に興味を持ち、20代半ばから独学で錦絵を描き始め、現在までに1,800枚以上の作品を制作した人物だったのである⁹。千社札を貼り歩く人たちには祭礼において中心的に活躍する人たちが多くことや、鳶は山車・神酒所の組み立てから巡行に至るまで祭礼で重要な役割を果たすことから、筆者は祭礼の周辺に展開した文化としてこれらを位置付けることで、地域的なバランスもとることを考えた。

以上のとおり、展示会1・2の2回の展示は一定の成果を取めたが、いくつかの課題も浮き彫りとなった。まず、氏子地域の人々は、祭礼の少し前から準備に忙しく、当日は祭礼に参加して多忙なため、なかなか展示に行く機会がないという点が問題だった。そこで 3331 Arts Chiyoda のスタッフが氏子地域の人々から昔の祭礼の様子の聞き取りを行い、古写真や古い映像などの情報提供を求め、祭礼当日もスタッフが巡行に参加し、その様子を画像・映像として記録に残していった。ことに祭礼に参加する氏子町の中心メンバーは、自分たちの写真などを撮る余裕がないことをしばしば口にしていたこともあって、大いに喜ばれた。こうして 3331 Arts Chiyoda 側が積極的に氏子町という地域に入っていくことによって、展示についても「ともに作り上げる」という意識が徐々に氏子町の人々の間に広がっていったことは大きな手応えとなっていった。

以後 3331 Arts Chiyoda における祭礼展示は、神田祭・山王祭に時期を合わせて毎年行うこととなり、表2のようにこれまで合計7回にわたり、関連するテーマを設けて開催してきた。平成27年の展示会3では木下氏監修で現代の町内における祭の拠点である御飯屋・神酒所を展示室内に再現したのが目玉で、同28年の展示会4では筆者監修で銀座親和会寄贈（日枝神社所蔵）の獅子頭や、山王祭で実際に使われている底抜け屋台などを展示した。そして同29年の展示会5では木下氏と筆者が共同監修というかたちで行った。神田神社の氏子町域は江戸時代以来川と橋の町であることに注目し、町と暮らしがどう変わってきたのかを、橋を手がかりに振り返る展示を企画し、橋を描いた錦絵や、祭礼行列が橋を渡る様子を映し出した映像や古写真などを展示したのである。そして翌30年の展示会6では筆者と筆者の千代田区時代の元同僚でもある加藤紫識氏の共同監修で、この年が江戸と東京の境目に当たる明治維新から150年の節目であることに因み、江戸から東京、近世から近代へと移り変わるなかで、山王祭と氏子町がどのように変化し受け継がれていったのかを捉えた展示とした。10年以上前から使用されなくなった木造の御飯屋（昭和初期制作）を 3331 Arts Chiyoda が受贈し、これを改めて組み立てて展示の目玉としたほか、氏子町に現存する商店として、麹町三丁目の垣見油化株式会社の変遷について関連資料を展示するなどした。さらに令和元年（平成31年）の展示会7では新元号になって初めての神田祭ということで、江戸、明治、大正、昭和、平成、そして令和と氏子地域が移り変わるなか、人々が江戸の文化を受け継ぎながら時代に応じて工夫し創作してきたものに注目し、各年号の節目における祭礼の様子を取り上げた。

このように毎年祭礼の展示を行うことで、各氏子地域とのつながりが深まるとともに、展示の認知度が高まっていき、資料や情報の提供や協力が増えていった。例えば、コミュニティスペースに地元神田五軒町町会の神輿を展示するのが恒例となったほか、かなりの量の古写真やホームビデオなどの映像、毎年色や文様もさまざまなデザインのものが作られる各氏子町会の手拭いや提灯などが集まるようになった。そして、展示に関するトークイベントや氏子町を歩くイベント、神田祭・山王祭に関する内容の落語会、お囃子体験や手拭い作り、山車の立版古作りのワークショップなどの関連イベントも定着してきている。

また、観覧者のなかからも、展示内容をふまえて授業に活用したいという小学校の教員や、自

分の研究の参考にしたいという大学生などが現れたことや、展示で用いた神酒所幕の複製を神酒所に使用し、これまで神酒所に飾っていた実物は千代田区教育委員会に寄贈されたという動きがあった¹⁰。

人間は展示において、自分たちが提供した資料が展示される様子を見に行く傾向が強い¹¹。なかには町内の仲間や知り合いを誘って大勢で見に来る人たちもいて、毎回この企画を継続して行うことで、徐々に氏子町の人々の協力姿勢が高まってきたといえる。ことに山王祭の年の展示では、3331 Arts Chiyoda があえて氏子町とは直接関係のない外神田の地にあることによって、分散し相互の交流の少ない氏子町の人々を同所の展示で一定の理解を得てひとつにまとめる役割を果たしていることの意義は大きい。

その一方で、そもそも収蔵庫や収蔵資料を持たない 3331 Arts Chiyoda は、展示の上での避けられない制約が少なくない。まず、元来中学校の校舎であったことから明らかなように、温湿度の管理などが難しいうえ、警備体制も万全とはいはず、既存の展示ケースについても仕様・点数に限りがある。しかもこの展示ケースとして照明や温湿度の管理は望むべくもないため、絵巻をはじめとする実物資料を借用して展示することは容易ではない。それゆえ、壁面を使った複製展示になりやすいため、必然的に写真や絵画の画像データを引き延ばして展示することが中心となる。実物資料には町会の神輿や手拭い・提灯、御飯屋や祭礼道具などが主体となるわけで、今後内容のマンネリ化が懸念されるところである。

それに加えて、3331 Arts Chiyoda が指定管理業者によって運営されている点も不安定な要素を孕んでいる。すなわち、神田・麹町・日本橋・京橋地域を中心にこれまで試行錯誤を繰り返しながら蓄積してきた信頼関係や情報の蓄積が、業者の変更により継続的に活かされなくなるのではないかという点である。もし今後指定管理業者が他社に代わったとき、こうした継続性ばかりでなく、業者によって運営方針もある程度変化する可能性があることは、地域博物館が抱えている問題と通底している。

おわりに

本稿では 3331 Arts Chiyoda が毎年行っている祭礼をテーマとした地域連携型展示について、筆者が監修という立場で関わってきたことをもとに、その到達点や課題点について述べてきた。現代アートという比較的独創的で意図するものが掴みづらく、難解なイメージに捉えられることの多いテーマを扱う 3331 Arts Chiyoda は、隣接する秋葉原を中心に展開するオタク文化と親和性が高い一方で、地域を担う中高年層に比較的なじみの薄い展示が多く、観覧者層の中心と、地域住民との乖離が当初より指摘されていた。たしかに、筆者の所属していた日比谷図書文化館では3万点以上の地域資料を収蔵し、展示活動でいわゆる「地域ネタ」は恒常的に発信されており、棲み分けが必要であることは明らかだった。しかし、3331 Arts Chiyoda では地域資料を収蔵していないからこそ多彩な活動ができ、祭礼をテーマとした展示においても、千代田区という自治体の枠を超える活動もある程度可能となった。この点では実際に日本橋や京橋地域を抱える中央

区の住民や企業の協力を得ることができ、その関係性は定着してきていると評価できる。また、3331 Arts Chiyoda のスタッフが芸術家集団であるがゆえに、展示制作の部分ではイメージや意見を詳細にすり合わせることで、小回りの利いた展示が可能となった。

そもそも江戸時代から両祭礼の巡行には附祭などを通して氏子町以外からの参加者も多いことが明らかとなっており¹²、現在でも実際の参加者は幅広い。こうした「すそ野の広さ」は氏子町の中心となる千代田区・中央区の夜間人口が少なく、区外の多くの住民が通勤・通学で通っていることからわかるように、両区以外の住民もさまざまな窓口から両祭礼に参加している実態からも窺えよう。江戸時代は町人主体の祭礼行列が武家の象徴である将軍の前を巡行するという行為が氏子町の人々の意識を高め、ひとつにまとめる力を有していた。

近年では先述の文化資源学会の諸活動を通して、祭礼を体感することの意義が一定の理解を生み、巡行の参加者が増え、企画が充実してきている。祭礼がもたらす地域を結びつける力を、このような動向に対応するかたちで展示という場面に援用するとともに、祭礼は伝統的な文化ばかりでなく、地域そのものを知るまたとない機会でもあることから、3331 Arts Chiyoda の祭礼展示は、両祭礼の氏子町に当たる東京中心部の歴史や文化を自覚・再発見する重要な機能となっていると考えられるのである。

祭礼は何かと観光や地域創生の文脈で取り上げられることが多く、その集客に対する影響力も非常に大きい。しかし、本来であれば、いかに伝統を継承しつつ新しいものを取り入れていくか、に注力すべきであり、そのためには地域を結びつける力を醸成することが必要不可欠である。その点では、平成 26 年の山王祭をテーマにした前掲展示会 2 において、茨城県石岡市が所蔵する山車人形のレプリカを借用し、組み立てなどは石岡の方々に依頼して行ったという経験は、今後、江戸東京から流失した山車や、神田祭・山王祭の文化が近代に伝播した地域との連携を企画するなど、まだまだ可能性の扉は存在しよう。地域を結びつけるのは、やはり地道な活動を継続的に蓄積していき認知度・理解度を高め、リピーターを増やしていくという、いわば「草の根型活動」が必要不可欠なのであり、その意味で、3331 Arts Chiyoda は従来の地域博物館のなしえなかった部分に活路を見いだせるものと期待できるのではないだろうか。

注

¹ 地域博物館の活動については、地方史研究協議会が平成 26 年（2014 年）1 月にシンポジウム「基礎的自治体の博物館・資料館の使命と役割 2—「地方史研究協議会版 地域博物館指標」を考える—」を開催し、地域博物館指標を提示した（『地方史研究』369 号）ほか、展示批評の記事をしばしば会誌に掲載するなど、基礎的自治体（都道府県・区市町村）の博物館・資料館のあり方について活発な議論を重ねてきている。筆者もかつて千代田区立四番町歴史民俗資料館・同日比谷図書文化館において、展示を含めた学芸業務全般に関わってきたため、本稿では自らの経験をふまえて 3331 Arts Chiyoda の活動に協力した実践的な内容が主体となっている。

² これは本稿で取り上げた 3331 Arts Chiyoda の主な客層が筆者の所属していた館とは明らかに異なっ

ていた点と、これまで東京女子大学の博物館展示論の授業において、「これまで見たなかで面白い展示を行う館 BEST3 はどこか？」との問いに、アート系の館を取り上げる学生と、地域博物館を取り上げる学生がはっきり分かれる傾向があった点においても、こうした実態を再確認することができた。

- ³ 中村氏は出身地の秋田県大館市で立ち上げたアートプロジェクト「ゼロタテ」を平成 18 年 (2006 年) より始めており、「美術と社会」「美術と教育」をテーマに地域創生に取り組んでいる。中村政人『コミュニティ・アートプロジェクト ゼロダテ—絶望をエネルギーに変え、街を再生する』(アート NPO ゼロダテ、2013 年)にはその活動成果が、中村政人編『新しいページを開け! 2,000 人を越えるアーティストが表現したアートプロジェクトの東京論』(コマンド N、2017 年)には本稿の 3331 Arts Chiyoda での活動を含めたコマンド N の 20 年間の活動成果が述べられている。ちなみに、千代田区では現在、地域博物館として日比谷図書文化館が存在するほか、NPO 法人が運営(所有者は神田木材企業組合理事長)している神田の家(遠藤家住宅)がある。これは江戸時代初期から続く内神田の材木商遠藤家の旧店舗兼住宅だったもので、昭和 2 年ごろ、ヒノキや杉などの銘木を使用し、職人たちの高度な技を駆使して建造されたものである。その後、昭和 48 年に府中市に移転保存されていたが、千代田区有形文化財(建造物)に指定されたことを契機に移築し、NPO 法人の運営となって平成 21 年 4 月から不定期に一般公開している。
- ⁴ 吉澤弥生『芸術は社会を変えるか?—文化生産の社会学からの接近』(青弓社、2011 年)。
- ⁵ 江戸時代の両祭礼の歴史や祭礼の詳細については、拙著『江戸の祭礼と寺社文化』(同成社、2018 年)参照。
- ⁶ 近代以降の神田祭・山王祭の変遷については、神田神社権禰宜岸川雅範氏の研究に詳しい(『江戸天下祭の研究—近世近代における神田祭の持続と変容』岩田書院、2017 年)。
- ⁷ 拙稿「麹町三丁目伝来の山車人形・神酒所幕—山王祭解明の手掛かりとして—」(『風俗史学』64 号、2017 年)。
- ⁸ その成果は木下直之・福原敏男編『鬼がゆく—江戸の華神田祭』(平凡社、2009 年)にまとめられている。筆者は福原氏が会長を務める都市と祭礼研究会に所属し、同研究会もこのプロジェクトに協力している。
- ⁹ 岡田氏はジャズ・ベーシストの故レイ・ブラウン氏の CD ジャケットや、直木賞作家の山本一力氏の『まとい大名』の表紙を手掛けているほか、個展をたびたび開催している。
- ¹⁰ この幕は河鍋晩斎の死去直前の作で、蘭陵王を描いたものである。そして幕の裏側には漢学者杉山鶏児によって、明治 22 年(1889 年)2 月 11 日の大日本帝国憲法(明治憲法)発布の式典に際し祝意を表するため、地元麹町四丁目(現千代田区麹町三丁目)の人々の依頼によって制作されたことが記されている。なお、幕は筆者が地元町会へ働きかけを行い、千代田区教育委員会に寄託(のちに寄贈)されることとなり、平成 31 年(2019 年)4 月に千代田区指定有形文化財(書跡/絵画・工芸品)となっている。
- ¹¹ 対象となるのは寄贈・寄託された資料や、展示のために借用した資料、あるいは展示で画像などに使用した資料などさまざまである。個人の場合は家族や知人とともに観覧に来られる場合が多く、地域博物館ではそれが親族・知人からの寄贈や新たな情報提供につながるという展開がしばしばみられる。展示が博物館活動のゴールではなく、新たな出発点でもあるという考え方は、筆者のこうした経験からも窺えるのである(拙稿「地域博物館における循環型活動をめざして—千代田区の事例から—」『地方史研究』359 号、2012 年)。
- ¹² 拙稿「神田祭と江戸町人文化—祭礼に関わる人々—」(『神田明神論集 1』神田神社、2017 年)。

(本学非常勤講師)